

巻頭言 ぼくはどうしてここにいるの？

一昔前、NHKのラジオ番組に「子ども電話相談室」というのがあった。子供が電話で質問してきて、スタジオの相談員が、分担してリアルタイムで答えてゆく。この番組を振り返った記事を読んだことがあるが、難問奇問のたぐいも紹介されていてなかなかおもしろい。「ぼくが歩くと、どうしてお月さまもついてくるの」とか、「かけ算をするとうえるはずなのに、なぜ0.7とかを掛けるとへるんですか」なども答えにくい質問には違いないだろうが、中でも今だに語り草になっている超難問、それが冒頭表題にかかげた、

「ぼくはどうしてここにいるの？」

これにはベテラン相談員のおじさんたちも、愕然として絶句したらしい。この子はただの迷子なのか、それとも、幼くして哲学的人間存在論に目覚めた‘恐るべき子ども’なのか…。瞬間、様々な思いが、相談員たちの脳裏を駆けめぐったに違いない。

野外研究を事とする者にとって、自分が常住するホームと、研究活動を行うフィールドとの関係は、重要な意味を持っている。端的に言えば、ホームとフィールドは近いほどよい。これに、情報の得やすさとか、就職後であれば勤め先の所在地等がからんで、パターンは研究者によって様々な形をとる。これを逆に研究施設の側から見ると、臨海実験所とか、演習林、天文台、火山研究施設などのフィールド密着型施設は、本来、立地する周囲の研究の便宜のために設置されたはずであった。交通機関の発達した今日では、設置当初より‘研住接近’の必然性は薄れているとはいえ、この立地の趣旨は、基本的には今でも生きてはいるはずである。

私が、その他ならぬ‘フィールド隣接施設’所属の大学院生だったころ、研究室内で、ホームとフィールドの関係について議論になったことがあった。発端は大学院生の旅費問題であるが、話し合いの場で当時の助教授が、院生が沖縄などに頻りに調査旅行に行くことを取り上げ、「ここにフィールドがあるのに、なぜ外に出て行くのか」と批判した。もとより院生の多くは研究所付近でデータを取っており、その上で視野を広げ、比較するために遠方へ出かけることをとやかく言われる筋合いはなかったが、しかしこの問題提起は、臨海実験所とは何かというテーマを、改めて我々に考えさせた。議論はこのあとも尾を引き、ゼミで発表者の研究内容に対し、「なぜここでやらなかったのか」と突っ込んだ院生に対し、別の院生が、「それならおまえのやっている研究は、ここでしかできないことなのか」と横やりを入れる一幕もあった。

私はこれまで、ホームから遠いフィールドに定期的に通うといったことはしたことがないが、調査旅行というのはいろいろやってきた。そこでの実感としては、まず何と言っても効率が悪い。日程的制限から、劣悪なコンディションで調査を強行せざるを得ないこともあり、また情報が限られるので、調査地点の選定にも不利である。あそこにも

行っておけばよかったと後悔することもよくある。また、もちろん金もかかる。現在のフィールドでは、大学院時代から通算でほぼ 20 年ほど研究を続けているが、ホーム・フィールド近接のメリットは極めて大きい。調査に時を選ばないし、長く住んでいるとどこへ行けばどういうデータが取れるかわかってくるので、最もよいタイミングで興味のある現象を調べられる。誰に聞けば何がわかるかといった情報が増え、地域での人間関係から、思いがけない収穫が得られることもある。地元に住んでいなければできないことというのもあり、年を経るほどに、ますます動きやすくなってきたというのが実感である。

現今、研究者たちはフィールドとホームの関係をどのように考え、またフィールド隣接施設では、このあたりの問題がどのように議論されているのだろうか。そうした施設に籍を置きながら、出張や調査旅行の絶え間がないとか、都会を通りぬけて、別の地方のフィールドに通っている（そしてその費用は、しばしば税金によってまかなわれる）などというのを見ると、むしろ都会に常住した方が都合がよいのではないかとさえ思えることがある。就職や、様々な個人的しがらみがあって割り切れないこともあるだろうが、最低限、ホームでの研究を主とし、その具体的発展のために遠方にも出かけるというスタンスを維持しないならば、「ここにフィールドがあるのに、なぜ」という、かつての某助教授の批判に、まともにさらされることになるにちがいない。

この春も、いくばくかの若手研究者が、就職によってもとのフィールドを離れるだろう。「ぼく（わたし）はどうしてここにいるの？」という自らへの問いかけを絶やさず、ホームとフィールドとの関係、その中での長期的な研究方針を意識しながら、‘地に足をつけた’研究を続けて行ってほしいと願っている。

< S >